

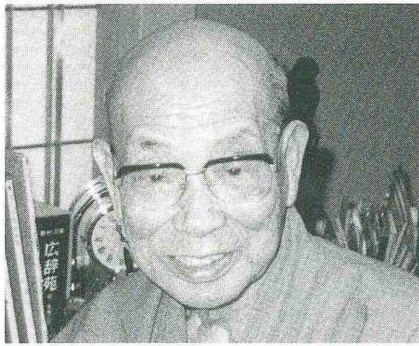
高山の文化を高めた人々 25

生涯にわたって教育を実践

なかにしいさお

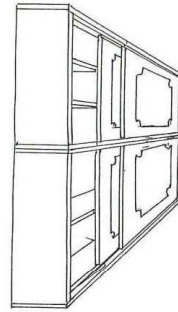
中西忠節

山本 弘



昭和の始めころ、義務教育は尋常科六年間で、後は中学校（五年間）へ進むか、高等科（二年間）でもう少し勉強するかという時代であった。当時の高山町には、東（尋常・男子）、西（高等尋常・男子）、南（高等尋常・女子）の三つの小学校しかなく、私は東校（尋常）を卒業後、西校の高等科に進んだ。

商業科と工業科に分かれており、すでに職業教育が行われていた。特に、工業科の教育施設は本格的なもので、木工室・動力室・塗装室が完備されていた。それらを設計し、運営していた教育主任が、これから語ろうとする私の恩師の中西忠節先生である（私たちは、親しみを込めて「チュウセツ先生」と呼んでいた）。

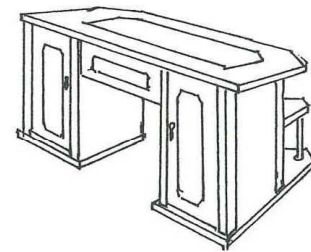


その中西先生の指導を受けた中でも特に技術が高かった青山君は、卒業するとき、縦・横六尺（約一八〇センチ）の二段重ねの本棚（右図）を製作し、展示即売会で十八円で売れた記憶がある。家一軒が二百円くらいで買った時代のことだから、たいへんな値段である。

*

さて、私が岐阜師範学校二年生の時の話である。手工科の授業に自由製作があり、他の生徒たちは、正規の週二時間だけで、小さな本棚を作っていた。私は、部活動のない日は時間がたつぷりあり、また、頭の中には西校時代の青山君の本棚のことがあったことから、毎日、手工室に入り

浸り、当時持っていないかった勉強用の大きな机（下図）の製作に取り組んでいた。



そんなある日のことだ。私の後ろで作業を見ていた大村先生が「山本、君はどこから来た」と尋ねられた。私は何気なく「はい、西校です」と答えたところ、大村先生は「うむ、そうか」とうなずいて去って行かれた。すると、隣にいた友人が「お前、常識がないやつやなあ。県内に西校という名前の学校が、一体いくつあると思うとるんや」という。さすがの私も、気がついた。師範学校は教員配置の関係で、全県から生徒が来ていたのである。その友人は続けた。「きつと、君が今作っているこの大きな机と、西校が結びついて、すぐに高山西校と分かつたんだらうよ。君って幸せなやつだなあ」

これが中西先生が育てられた高山西校工業科の「実績」である。私は、年を経るほどに、この話の持つ意味を深く感じている。かつて、一人の業績で、全県に学校の名を残

した人がいたのだろうか。今のように、世界中のできごとがすぐに分かる時代ではない。高山線はまだ萩原までで、全線開通はその二年後のことである。出身が飛騨だということ「今でも猿と一緒に」とからかわれ、その名前を言いづらかった時代の話だ。そんな昔「高山に西校あり」と認められていたのである。

*

中西先生の功績はこれにとどまらない。版画家の守洞春氏を講師に招き、いち早く学校教育に版画を取り入れたのはじめ、子ども会の育成、新聞教育、同和教育など、さまざまな分野で次々と頭角を現わされた。子ども会のジュニアリーダークラブ、刈谷市子ども会との交流、宮川への鯉の放流などを手がけられたのが、中西先生であることをご存じだろうか。

これらのことを含め、先生の足跡の多くが今も連綿と受け継がれていることを考えるとき、中西先生は、確かに私たちの心の中に生き続けていると思わずにはいられないのである。